

研究ノート

前線にいる闘士をいかに支えるか

—スペイン内戦における、アクシオン・カトリカ男子青年部部长
マヌエル・アパリシ・ナバーロの活動（1936-1939 年）—*

渡 邊 千 秋**

はじめに

フランコ独裁体制は、その未来を左右した体制初期において、スペイン内戦中にフランコ陣営を支持したカトリック教会の関連組織であっても、体制側の組織と競合する団体を整理・統合する必要に迫り込まれた。公式には、1940 年 8 月 2 日の法令によって、既存の諸協会・団体は「国民運動」のもとに統合されることを定めた。対象とされたカトリック教会が運営に関係する労働団体としては、たとえば全国カトリック農業連合（Confederación Nacional Católico-Agraria: CNCA）が、1940 年 11 月に国民運動へ吸収された¹⁾。また、学生のシンジケートとみなされたスペイン・カトリック学生連合（Confederación de Estudiantes Católicos de España: CECE）も、既に 1939 年 9 月 23 日の法令で統一ファランヘ党の学生組織であるスペイン大学組合への吸収が命じられてい

* 本研究は JSPS 科研費 JP18K01040 の助成を受けたものです。

** 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) Carlos GINER DE GRADO: “Sisinio Nevares (1878-1946): un doctrinario del catolicismo social español”, *Revista de Fomento Social*. 135, septiembre 1979, p. 326. (DOI: <https://doi.org/10.32418/rfs.1979.135.3406>). CNCA の結成から解散までの歴史については以下の文献を参照されたい。Juan José CASTILLO: *Propietarios muy pobres. Sobre la subordinación política del pequeño campesino en España. La Confederación Nacional Católico-Agraria, 1917-1942*, Madrid, Servicio de Publicaciones Agrarias, 1979. なお本稿で用いる全 URL の最終閲覧日は、2023 年 2 月 8 日である。

た。このような処置に対して、スペイン・カトリック教会の聖職者ヒエラルキーの頂点にあるトレード首座大司教ゴマ枢機卿は反論し、抗議したが、結局は体制側に押し切られてしまったのである²⁾。こうして少なくとも表面上は、フランコ独裁体制は、スペインにおけるカトリック・アクション組織の先駆的な活動を担うはずであった職能別専門部門の組織を一度は根絶やしにすることに成功した。その後労働者は1940年代半ばに表面的な信仰養成団体として再度グループが結成されたが³⁾、その後1950年代半ばに至るまで、カトリック的宗派性を明確にした学生独自の組織が結成されることはなかった⁴⁾。

スペイン・カトリック教会は、自らの平信徒組織が次々と政治的な理由によって解体されていく現状を前にして、対策を講じる必要に迫られた。体制による組織の合併吸収を免れるために用いられた論理は「信仰にかかわる事業」は教会が担当する領域である、というものであった。そうして、教皇庁の方針のもと、全世界的に展開していたカトリック・アクションのスペインにおける組織体、「アクション・カトリカ」こそ、そしてなかでもその男子青年部（以下青年部と略記）こそは、青年平信徒の人格に宗教的涵養を与える組織なのだと体制側に認めさせることに成功したのである。青年部は組織を維持することができた。このような結果となった要因のひとつには、青年部が、内戦下の困難のなかでも積極的な活動を維持し実績を積んでいたことが影響していると考えられる。

そこで、本論文では、内戦前夜から戦争終結まで青年部部長を務めたマヌエル・アパリシ・ナバーロの活動に注目したい。戦闘の続く3年弱のあいだに、多くの部員が参戦し、通常の活動が低迷するなかでも、いかに彼が組織の維持・発展をはかり、後衛からの精神的なフランコ陣営支援をとおして、戦後の

2) Miguel Ángel DIONISIO RIVAS: *El cardenal Isidro Gomá y la Iglesia española en los años treinta*, (Tesis Doctoral), Madrid, UNAM, 2010, pp.467-469.

3) 以下を参照されたい。José CASTAÑO COLOMER: *La JOC en España, 1946-1970*, Salamanca, Sígueme; Basilia LÓPEZ GARCÍA: *Aproximación a la historia de la HOAC, 1946-1981*, Ediciones HOAC, 1995.

4) Feliciano MONTERO GARCÍA: “De la JUMAC a la JEC. Aproximación a la historia de la A.C. estudiantil”, en F. MONTERO GARCÍA (ed.): *Juventud Estudiante Católica, 1947-1997*, Madrid, JEC, 1998, p.27

組織母体を維持するに至ったかを考察しよう。

青年部員の参戦について

フランコ陣営を支持して内戦にかかわった人びとは、政治的イデオロギーからみれば多様であった。第二共和政期以降、青年部は関係者に対して「非政治主義 (apoliticismo)」をとる方針を打ち出していた。ここで青年部がいう「非政治性」とは、団体として特定の、唯一の政党グループを支持することはない、というものである。あくまでも、青年部が特定の政治団体と同一視されることをさけるための方策であり、部員が政治運動に興味がないということを意味してはいない。第二共和国期には、左右両派の諸政党に対する青年層の関与が進んだ。それまで政治に直接関わってこなかったカトリック青年平信徒のなかからも、政党に入党する者が現れた。青年部の執行部役員であった者で、政党で重要な役職を得るものが誕生する。そして、年齢制限により黨員となることができない者も「シンパ」として党の活動にかかわる状況が生じたのであった。こうして青年部は、右派には限定されるが、さまざまな政治団体の闘士となるものを輩出し、実際に、政治家育成の母体となる組織として、広く認識されるに至った。内戦勃発直前には、左派諸組織の青年と青年部部員とのあいだの「小競り合い」と、それがエスカレートすることによる暴力的な抗争が常態化していた。

そういった状況を背景に、第二共和政期に熱心に政治活動を行っていた青年部部員たちのなかには、内戦勃発を期に、共和政を打倒して自分の政治的理想を実現することを目的に自ら進んで参戦する者が現れた。彼らは、ファランヘ党⁵⁾、レケテ⁶⁾、アクション・ポプラー⁷⁾、レノバシオン・エスパニョー

5) ホセ・アントニオ・グリモ・デ・リベラが中心となって1933年に結党された。イタリヤ・ファシスト党の影響を色濃く受けた。

6) 20世紀に作られた、伝統主義的王党派であるカルリスタの準軍事的なグループである。

7) 第二共和政期、前身のアクション・ナシオナルを引き継いで結成された、カトリックの宗教政党である。のちに、スペイン右派自治連合 (Confederación Española de Derechas Autónomas) 結成の母体となる。

ラ⁸⁾、といった、第二共和政下の右派諸政党の旗印のもとに民兵として集った。

実際の状況を見てみよう。1936年11月の青年部機関誌『しるし (Signo)』は、2つの司教区連合について既に参戦済みである青年部部員の数进行明らかにした。具体的には、ブルゴス司教区連合とサラゴサ司教区連合の状況を報告し、ブルゴス司教区連合の部員では450名、サラゴサ司教区連合の部員は412名が参戦済みであることが記されている。また、サラゴサ司教区については、全部員数が612名であることを明示しており、よって、示された数値を信じるとするならば、サラゴサ司教区連合からは部員の約67パーセントが内戦勃発後の初期段階で、何らかの形で参戦していたと考えられる⁹⁾。

ただし、状況はより複雑である。青年部員は、必ずしも自分たちの思想に合致する形で戦線に向かったとは限らない。内戦勃発時に、どこにどのような状況でいたのかがその後の人生を方向づけた。たとえば、共和国陣営が支配する領域内にいた青年部部員のなかには、共和派に捕らえられ、殺害された者がいる。また、共和国陣営で徴兵され、内戦を共和国軍側で戦うことになった者もあり、そのなかには脱走兵として殺害された者もいる。くわえて、共和派の搜索を逃げ延び、フランコ陣営の支配領域に入ることができた者もあり、そのなかから、あらためてフランコ陣営側で徴兵されたり、志願兵となったりする者がでたのであった。そのように、青年部部員の大多数が戦争に巻き込まれている非常事態にあって、青年部がそれまで果たしてきた、教区教会を中心とした平信徒の交わりの中・宗教的な人格形成の場の提供といった通常の活動事業を継続することは非常に困難であった。

執行部メンバーが内戦下でおかれた状況について

以下、スペイン内戦勃発時の青年部執行部である上級評議会の構成員が内戦

8) 王党派グループの1つ、アルフォンソ派の流れをくむ右派、権威主義的政党。レノバシオン・エスパニョーラ党首だったカルボ・ソテロの暗殺が、内戦勃発のきっかけとなった。

9) なおこの数値には、従来の徴兵制によって、内戦勃発以前に兵役についていた者を含んでいる。

中にどういった状況におかれたのか、整理しておこう。

第二共和政期には、全国レベルの指導部である上級評議会はマドリードに置かれ¹⁰⁾、正副2名の聖職者顧問にくわえ、青年平信徒の役員11名で構成されていた。内戦がおきた1936年7月半ばは、夏休み中であったこともあり、上級評議会メンバーには、通常の居住地とは異なる場所にいたケースも散見される。また、夏休みを活用して精神的修養を行う司教区連合指導部や教区教会も多く、またアクション・カトリカ中央評議会の肝いりで夏期講習会が開催される時期でもあることなどからみて、通常の生活圏から離れていた部員も一定数いたことは想像に難くない。戦争によって各陣営の支配領域ごとに地域は分断され、特に内戦勃発直後の夏の間は、共和国陣営の支配領域にいた有名幹部の生存確認ですらも、ままならなかったのである。

【表1】内戦前後の上級評議会構成員

氏 名	内戦勃発時の役職	内戦後にどうなったか
M. アパリシ・ナバーロ	部長	公務員。聖職者
E. フリエンド	副部長・会計兼任	エンジニア。AC 壮年部
V. ガルシア・オス	書記長	大学教員。オプス・デイ
ブラニャス	委員（候補会員）	不明
M. ロメロ・レマ	委員（信仰・カテケシス）	神学生。聖職者
F. アルバレス・アギーレ	委員（宣伝）	不明
J. アスナル・サバラ	委員（巡礼）	赤十字役員
J. ペレス・バルセラ	委員（研究）	ジャーナリスト。AC 壮年部
E. ゴメス・リオス	委員（労働者形成）	内戦で死亡
M. ウベダ・プルキス	委員（身体形成）	聖職者
M. マククロン	委員（不在者）	内戦で死亡
H. コルテス・パストール	上級評議会聖職者顧問	トレード大司教座聖職者
E. ベリョン・ピラル	上級評議会副聖職者顧問	上級評議会聖職者顧問

(Signo, BACNP, *Guía de la Iglesia y de la Acción Católica Española* 等に基づき筆者作成)

表1に見るとおり、上級評議会メンバーのなかには、内戦で死亡した、共和国陣営によって殺害されたことが明確に記録されている平信徒が2名いる。また内戦中、上級評議会を指導した聖職者顧問1名の安否は長く不明のままであ

10) マドリードの中心部、レティーロ公園やアルカラ門に近い、コンデ・デ・アラランダ通り15番地にあった。

った。志願兵のみが戦闘に加わったわけではなく、新たに徴兵されるもの、また既に徴兵義務を果たしていたものまでもが再召集されるなど、組織が不安定な状況に陥る要因が多々あるなかで、青年部の維持に努めたのは、青年部部长、マヌエル・アパリシ・ナバーロであった¹¹⁾。

アパリシの略歴について

ではここで、アパリシの来し方についてみておきたい。アパリシは、1902年、マドリードに生まれた。市街のサン・イルデフォンソ教区教会で幼児洗礼を授けられ¹²⁾、初等教育はマドリードで受けた。その後、父親の仕事の都合でバルセロナへ転居した。そのため、中等教育はバルセロナで開始、そして最終的にはタラゴナで修了し、1922年には国家試験に合格して税関職員となった。最初の任地はアストゥリアス地方であったが、その後、マドリード、そしてガリシア地方のア・コルーニャへと配属され、1924年には再び、マドリードへと勤務地は移動になった¹³⁾。

アパリシは、公務員としての堅実な生活を営みつつ、日常的な宗教実践を怠らない敬虔なカトリック平信徒であった。毎日のようにミサに通い、聖体拝領を受け、一日の終わりにはイエズス・キリストのために働いたかどうかを自身に問い直す、祈りのなかに生きた人物であった¹⁴⁾。

アパリシは、大衆のカトリック的宗教心を鼓舞するため教皇庁が全世界規模

11) 内戦を生き延びたメンバーに関しては、フランコ体制下で壮年部組織に移ったものがあることがわかる。また、大学教員、エンジニア、ジャーナリストなど、独裁体制の政治社会を支える支持基盤となる職種についていたことも明らかである。

12) “Manuel Aparici Navarro, miembro de la Acción Católica, declarado venerable por el Papa Francisco”, *Ecclesia*, 10 enero 2014. (<https://www.revistaecclesia.com/manuel-aparici-navarro-miembro-de-la-accion-catolica-declarado-venerable-por-el-papa-francisco/>)

13) Vicente CARCEL ORTÍ: *Diccionario de sacerdotes diocesanos españoles del siglo XX*, Madrid, BAC, 2006, p.146; “Datos familiares y personales”, <http://www.manuelaparici.com/vida/datos-familiares>

14) アパリシの日記には、いたるところに神への言及、祈りのことば、などが記述されている。

で推奨したアクション・カトリカのスペインにおける組織化に大きく貢献した人物でもある。まずは組織がカトリック青年会と呼ばれていた1929年頃に、マドリードのサン・ヘロニモ・エル・レアル教区教会で、教区セントロの会計をつとめ、1930年には教区セントロ副会長、1931年には同教区セントロ長となった。

他方で、日刊紙『討論(*El Debate*)』編集長であり、20世紀のスペインにおいて、大学教員、政治家や法曹界の重鎮を数多く輩出した平信徒のエリート集団である「カトリック全国布教者協会（以下ACNPと略記）」の会長であったアンヘル・エレラ・オリアによって見出され、またその影響を受けたことで、アパリシは人生における転機を迎えた。彼は1929年にはACNPの正会員となり、また1933年からはACNPマドリード支部の評議会委員を務めた。

こうして、アパリシは、よきカトリック青年平信徒リーダーとして頭角をあらわし、期待され、カトリック青年会の全国レベルの執行部でも重要な役職を担うようになる。まず、機関誌『矢(*La Flecha*)』の編集部に入り、1933年から1934年にかけては全国副部長、1934年から1936年には全国部長を務めた。

カトリック青年会が改組をうけてアクション・カトリカ青年部となって以降も組織に貢献した。1935年、アクション・カトリカの全体的な改組にともない、一般規則変更を通じて、カトリック青年会の執行部は、中央評議会(Consejo Central)からアクション・カトリカ青年部の上級評議会(Consejo Superior)に名称変更された¹⁵⁾。しかし実質的に2つの評議会の平信徒構成員に大きな変動はなかった。1934年以来、組織改編とその後の分裂の危機の時期にあって組織をまとめる役割を果たしたのは、アパリシである。

第二共和政のもとで政治的反教権主義が強まり、教会全体にとっての逆風が吹く中で、アパリシが指導組織内での地位的な上昇を遂げていたことは注目に値するであろう。改組にともない、スペインにおけるアクション・カトリカが各教区教会において男女別・年齢別の4部門教区セントロを創設し、司教区連

15) “Nota importante”, *La Flecha. Órgano Oficial de Juventud Católica*, 36, mayo 1935, p.169.

合との結びつきを徹底しようとする波にのって、組織の階層構造がしっかりと構築され、強化されるなかで行われたアパリシの昇任人事には、聖職者・青年平信徒双方からのアパリシの管理能力への期待があったことがうかがえよう。

しかしながら、アパリシ自身は、まさに第二共和政期末期に、聖職者として生きる道を選ぶべきか迷い、悩み、神に道を示してくれるよう乞う日々を過ごしていた。青年部を放置して神学生となるべきか否か、逡巡している様子が日記には記されている¹⁶⁾。そのような心理状態を反映しているのだろうか、この時期のアパリシが強い「カリスマ性」をともしう組織リーダーであったかについては、疑念が残るといわざるをえない。たとえばアパリシを長とする上級評議会は、部員の政治への関与に関して、政党幹部は青年部の役職には就けないことや若年層にあたる候補会員は政治団体に関与しないよう呼びかける通達をだしているのだが、大多数の部員は見て見ぬふりであった。アパリシは非政治主義の主張に基づいて、青年部は青年部の役職者に対し政党での役職を得てその活動に参加することを禁じたうえ、まだ自分で善悪判断ができないと判断される若年層の部員には政党活動に参加しないようにとする活動実践を要求した。しかし、それに反して、青年部員の多くが、青年部から離れ、政治運動に自ら進んで身を挺し、政治化していったのである¹⁷⁾。

内戦期における青年部のキーパーソン、アパリシ

内戦勃発直後、青年部の意思決定機関でありマドリードにあった上級評議会は、共和国陣営によって事実上、その機能をはく奪された状況に陥った。1936年7月から8月にかけては、混乱が続いた。その状況下では、内戦勃発当初よりフランコ陣営下にあったスペイン北部の都市ブルゴスが、「赤の地帯

16) たとえば、当時聖職者となることを選択した ACNP 会長アンヘル・エレーラとの会話にみることができる。

17) カトリック青年平信徒の政治化に関しては、以下を参照されよ。Chiaki WATANABE: *Confesionalidad católica y militancia política: La Asociación Católica Nacional de Propagandistas y la Juventud Católica Española (1923-1936)*, Madrid, UNED, 2003.

から逃れる青年にとってのゴール」となった¹⁸⁾。

部長であるアパリシの所在が不明であったため、サラゴサ司教区連合のインシアチブのもと、会合が開かれた。そして、上級評議会の委員の一人であったアスナール・イ・サバラを中心に、聖職者ヒエラルキーの合意のもとで、上級評議会にかわる代行委員会が設置された¹⁹⁾。9月4日のことである。同日、ラジオ・カステリーヤを通じて設置に関するメッセージが放送され、この時の合意事項は司教区連合、教区セントロ、そして新聞等に書面で送付された²⁰⁾。この臨時の機関のメンバーは、平信徒としてはアスナールのほか、ホセ・ロドリゲス、ホスエ・バリオカナルが名を連ね²¹⁾、またブルゴス司教座付きの司祭フェリックス・アララス²²⁾と、フェリックス・モソという聖職者2名がそれぞれ代行聖職者顧問、代行副聖職者顧問の役割を担った²³⁾。

しかし1936年9月15日に、アパリシがブルゴスに到着した。その後は、アパリシが青年部の陣頭に立って戦禍の中の青年部の活動を方向づけたのであった²⁴⁾。彼自身は、フランコ陣営の支配領域となった北部ガリシア地方で内戦勃発を知った。その直後マドリードへと戻り、母親を連れて再度、兄のいるガリシアへと向かった。混乱のなかで一旦国境を越えてポルトガルへ出国し、状況をみて再度ガリシアからスペインへ再び入国した後、ブルゴスへと移動し

18) “Aventuras de un periódico “pasado”. SIGNO cuenta su historia. Errante durante un año”, *Signo*, 46, 21 mayo 1939, p.4. 共和国陣営の支配領域を、文字通り “Zona Roja” と呼んでいる。

19) “Se crea una Comisión Gestora”, *Boletín de la U.D. de Juventud de Acción Católica Santiago de Compostela*, 18-19, agosto-septiembre 1936, p.2.

20) “La Juventud de Acción Católica en la guerra santa de España. Los primeros pasos de la Obra en la zona liberada”, *Signo*, 46, 21 mayo 1939, p.2.

21) しかし、これら平信徒3名は、1936年11月時点では戦地に赴いていた。“Nuestra aportación al Movimiento Nacional”, *Signo*, 4, 20 noviembre 1936, p.2.

22) Vicente CARCEL ORTÍ: *Diccionario...*, pp.169-170.

23) “Una importante nota de la Acción Católica. Comisión Gestora de J.M. de A.C. en Burgos”, *ABC*, 10 septiembre 1936, p.10.

24) Secretariado de Publicación de la Junta Técnica Nacional de la ACE: *Guía de la Iglesia y de la Acción Católica Española*, Madrid, Ediciones Acción Católica Española, 1943, p.465.

た²⁵⁾。フランコ陣営の本部が置かれたブルゴスに身を置きつつ²⁶⁾、部員の出征を見送り、戦闘で死亡したり、また共和国陣営で殺害された部員のニュースを目の前にしながら、青年部組織の立て直しのために、内戦で引き裂かれた部員たちを精神的に結ぶため、働いたのである。

アパリシの働き：前線と後衛を精神的につなぐ

アパリシは、前線で戦いに身を投じる部員と自らのように後方にいる者との関係が断絶することを避けようとした。まずは、平時のように機能しないとはいえ自らの配下に置かれた上級評議会と、前線にいる部員との間のコミュニケーションの方策を探ったのである。そして彼は、1936年7月6日付の第3号で発刊を停止していた青年部機関誌『しるし』の発行を再開したいと望んだ。結果として、『しるし』第4号は、ブルゴス近隣のメディナ・デル・カンポで、1936年11月20日付で発行された。こうしてアパリシ以下青年部の指導層は、後衛の教区セントロに残った部員はもとより、前線で戦争に協力する部員、そしてまだ部員にはなっていない潜在的な候補者へむけた言論を展開することになる。また、この号は、軍部の検閲を受けたことも記しておきたい²⁷⁾。

アパリシは、内戦を自らの生きる時代における宗教的な「再征服（レコンキスタ）」として認識し、青年部員に呼び掛けるため、この号には署名記事を掲載した。少し長いが訳出する。

まずは再刊された機関誌『しるし』をつうじて神の御業を伝える意思を以下のように述べる。

今日ほど私たちの雑誌のタイトル、『しるし』が大きな意味をもったこと

25) “Manuel Aparici, Capitán de Peregrinos”, <http://www.manuelaparici.com/vida/apostolado-segla/apostolado-segla-1936>

26) ブルゴスが、内戦下、フランコ陣営の政治的・文化的中心地となった理由に関しては、以下を参照されたい。Luis CASTRO: *Capital de la cruzada. Burgos durante la Guerra Civil*, Barcelona, Critica, 2006.

27) *Signo*, 4, 20 noviembre 1936, p.2.

はない、『しるし』は、連続性の、存続の、生存の、そして推進のしるしになりたい、つまりは、神の御業になりたいのだ。(…中略…)『しるし』は、全スペインはキリストのためにあるという、私たちの偉大な事業にまつわる古き思い出を想起させる、皆に知られた声である。それは同時に、神の試みが私たちと共にあるということだ。(…中略…)何のために困難について話すのだろうか？上級評議会は散り散りになっている。『しるし』の編集長も編集員も、赤の地帯にいた。また青年たちは前線にいき、そして資金は…いつものように尽きたままだ。全てが困難と障壁であった。しかしすべては打ち負かされた。『しるし』は再び私たちの掌中にある。

そして紙面を用いて、戦いに関わる者たちの働きが新しい「再征服（レコンキスタ）」を成し遂げるはずであると説く。兵士となった部員を英雄にみたと、彼らの戦いをキリストのための再征服の戦いだとするのである。

『しるし』のページを通して、君たちに、私たちの生きざまや夢の反映である、青年部員が生きている、そしてすべてのスペインの青年層が生きている、英雄的な時をもたらしたいと願う。それは、栄光の時、キリストのための、ヒスパニック世界の偉大な再征服(reconquista)の前触れである。

スペインとキリストのために、君たちは前線で、兵舎で、そして病院で働く。なりたいたったものであり続けなさい。征服者になりなさい、スペインの解放者になりなさい、単に私たちの土地にはびこるロシアの弊害だけでなく、魂に隠れてしまった過ちや不道徳を征服するものになりなさい²⁸⁾。

アパリシにとっては、内戦は、信仰を守るため、そして信仰が生きられる場所としての教会組織を守るために必要な戦いであり、共和国の反教権的な宗教

28) Manuel APARICI NAVARRO: “De cara a Santiago”, *Signo*, 4, 20 noviembre 1936, p.1.

政策からの解放を目指す闘いでもあった。その点において彼は、後衛から読者を鼓舞してフランコ陣営の勝利に貢献することに青年部の存在意義を見いだした。そのためには、前線においても組織拡大をはかる闘士である部員の精神的支柱となり、彼らの活動の動向を知り、紙面を通じて後衛からエネルギーを還元したいと願った。

アパリシは、この戦争は神によって許されたものである、と主張しつつ、青年部のもつ精神と祖国愛とが一体化することを願っていた。敵側の若者たちをも神の国に導くことが、青年部の役割であると考えていた。そして、部員にむけて以下のように述べるのである。

今日では、祖国愛、危険の感覚、皆が経験する軍事行動の成り行きと不自由が、私たちをその他の青年たちと融合させる。(…中略…) 君と同じように、高貴で心の広い魂の持ち主であるすべての若者にとっては、この戦争は神の時なのだ。神は、他の隠れた理由もあるうが、アクション・カトリカの青年である君が、若者たちの中で生きられるよう、そして若者たちを神の国へと連れていけるようにするため、この戦争が起こることを許されたのだ²⁹⁾。

アパリシの署名記事は、トレード首座大司教ゴマ枢機卿が1937年7月にスペイン司教団の集団司牧書簡の形でフランコ陣営の戦いの正当性を公にするよりも以前に公にされている。その内容から、アパリシが、内戦がおきた理由を宗教的様相に結びつけ、フランコ陣営の戦いを正当化していたことがわかる。彼の考えは、高位聖職者による見解が公になるのよりも早く、『しるし』を通じて戦場の青年兵士に喧伝されていたことになる。「内戦は宗教的動機による戦争であり、敵から宗教的なスペインを取りもどす再征服運動なのだ」という

29) Manuel APARICI NAVARRO: “En la guerra como en la paz: ¡Todas las organizaciones, en marcha! ¡Todos los jóvenes, en acción!”, *Signo*, 5, diciembre 1936, p.1.

思考は、戦闘で自らの生命が犠牲となることも厭わない心性をも生み出すことに加担した。また、戦線に赴かざるをえなかった青年層が過酷な状況を受容しやすくなるよう用いられた、と考えられよう。

そのようななかで、アパリシがずっと念頭においていたのは、戦いの聖者、サンティアゴ（聖ヤコブ）によるとりなしであった³⁰⁾。実は、1937年はサンティアゴ・デ・コンポステーラにとっての聖年にあたり、青年部は、共和国期に既に、部をあげて国内にあるカトリックの聖地、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの大巡礼を行い、青年部の第3回全国大会を1937年夏に大々的に開催することを決定していたのだった。実際のところ、1936年8月末には、第7回全国総会をマドリッド近郊で開催し、翌年開催予定の全国大会の詳細を話し合う予定でいたのだった³¹⁾。内戦勃発で、大会の準備会議の役割を果たしたであろうマドリッドでの全国会議は開催されなかった。しかし、戦中も、アパリシは、第3回大会開催を実行する考えを捨てなかった³²⁾。そして彼の情熱は、数少ない、ブルゴスにいた上級評議会メンバーにも波及していた。たとえば、副聖職者顧問エミリオ・ベリョンは、1937年初頭、第3回全国大会開催と内戦が同時に起きるとは予想することができなかったが、この一致こそ神の賜物であり、皆が犠牲をはらってでも「キリストのためにすべての若者を獲得する」ためにサンティアゴ・デ・コンポステーラに集合するように呼びかけた³³⁾。また、サンティアゴでの聖年が始まる7月25日にむけて、青年部は、前線で戦う者たちには状況に応じて祈りを捧げるように、また後衛にいるすべての部員に対しては「神がお助け下さる、だからサンティアゴだ (Dios ayuda

30) 特に中世における聖ヤコブ崇敬の成立については、以下を参照されたい。田辺加恵、大原志麻、井上幸孝『聖ヤコブ崇敬とサンティアゴ巡礼—中世スペインから植民地期メキシコへの歴史的つながりを求めて』春風社、2022年。

31) “Convocatoria de la VII Asamblea Nacional”, *La Flecha. Órgano Oficial de Juventud Católica*, 48, mayo 1935, p.133; “La VII Asamblea Nacional”, *Signo*, 1, 6 junio 1936, p.3.

32) アパリシのサンティアゴへのとりなしを求める内戦勃発以前からの傾向は、1936年末以降強まり、以降、内戦下においては機会あるごとに全国大会開催とサンティアゴへの巡礼を鼓舞し続けた。

33) Emilio BELLÓN: “El año de nuestro Congreso”, *Boletín de la U.D. de Juventud de Acción Católica Santiago de Compostela*, 23, enero 1937, p.5.

y Santiago)」をスローガンにサンティアゴを目指し、全国大会へ参加する準備をするよう呼び掛けている。このような熱意は、非戦闘地域にいた 17 才未満候補会員を含む部員にも共有された³⁴⁾。こうして、聖年が始まる直前まで、上級評議会は大会開催の望みを捨てず、アパリシは候補会員の参加に特に期待を寄せていた³⁵⁾。しかし、戦闘は終らず、大会開催は延期された。1937 年 7 月末以降、上級評議会は、内戦終了後にサンティアゴ巡礼を実施することを夢見つつ、前線にいる兵士の精神的補佐と、後衛における青年部組織の維持とに尽力することになった。そうして、上級評議会は、サンティアゴの祝日である 7 月 25 日の前後には、フランコ陣営による共和国陣営スペインの再征服を願って、全国の司教区連合に宗教的行事を開催するよう呼びかけた³⁶⁾。また、前線で従軍司祭の協力のもとに作られた青年部の前衛セントロには、世界を再征服する御業によって戦闘が早期に集結することを願い、またそのために払われる犠牲と殉教とを心にとめるよう呼びかけている³⁷⁾。

独裁政権と青年部との邂逅

このようなフランコ陣営の勝利を願う青年部の行動によって、徐々にフランコ陣営の中樞は、青年部の活動にみられる宗教的な側面を重視し、体制翼賛の統一ファランヘ党とは別個の組織であって、それを補強するであろう青年部の存在を容認するようになったとみられる。1938 年 7 月のサンティアゴの祝日に、アパリシはその当時の上級評議会メンバーの 1 人、マヌエル・マ

34) Juan Luis GIMENO: “El 31 se celebrará en Santiago la apertura de la Puerta Santa. Para esta ceremonia que abre el Año Santo en que tendrá lugar nuestro Congreso. Todos los Centros enviarán sus banderas”, *Boletín de la U.D. de Juventud de Acción Católica Santiago de Compostela*, 22, diciembre 1936, p.1.

35) Manuel APARICI NAVARRO: “Convocatoria para el Congreso de Santiago. A todos los jóvenes y aspirantes de al Juventud de Acción Católica”, *Signo*, 23, enero 1937, p.3.

36) “La Juventud de Acción Católica celebra con entusiasmo la fiesta del Apóstol”, *Signo*, 30, 14 agosto 1938, p.3.

37) Manuel APARICI NAVARRO: “Circular del presidente nacional a los Centros de Vanguardia sobre la Vigilia y fiesta de Santiago”, *Signo*, 28, 10 julio 1938, p.3.

ルティネス・ペレイロを伴って、サンティアゴ・デ・コンポステーラを訪れた。この時の行事の折には、内務大臣ラモン・セラノ・スニェールがフランコの代理として献辞のことは述べた³⁸⁾。前年1937年の同祝日でも、大巡礼の実施や大会の開催こそできなかったものの、聖地における宗教行事は小規模ながら行われ、アパリシとペレイロは彼の地を訪れて宗教行事を開催し、集うことのできた司教区連合の幹部らと会合の場をもった³⁹⁾。しかし、この折には軍人や政治家の参加は見られなかった。この点からは、1938年1月、フランコ陣営における第一次内閣が誕生して以降、青年部指導層とフランコ陣営指導層とのあいだを結ぶ公的なネットワークが徐々に構築されていったと考えることができよう。

組織の存続・活動の維持を目指して

アパリシは、内戦中、兵士として前線に赴くことはなかった。あくまでも後衛から、上級評議會を率いて、青年部の活動を戦争下でも継続するための規範を示すことに力を注いだ。フランコ陣営側の非戦闘地域では、17歳未満の候補会員のための人格形成事業を進展させようとする一方で、教区セントロに残った正会員のあいだでも研究サークルを開催しようとするなど、できるかぎり青年部の通常の活動を維持しようとした。くわえて、前線でも勧誘活動を通じて、これまでは青年部と関わりのなかった青年兵士を青年部の活動に引き込むよう指導した⁴⁰⁾。そのため、共和国陣営から「解放され」非戦闘地域に入った司教区連合にむけてさまざまな通達を送付すると同時に、前線にいる部員が

38) “La Juventud de Acción Católica celebra con entusiasmo la fiesta del Apóstol. Santander, con diez mil ejemplares, consigue el primer puesto en la venta de SIGNO”, *Signo*, 30, 14 agosto 1938, p.3. この折の内務大臣の演説内容は不明である。

39) “El día de Santiago celebrará una vigilia, en la Catedral, la J. de A.C. Vendrán los Centros de la España liberada con sus banderas. A ella serán invitados los alumnos de las Universidades católicas extranjeras”, *Signo*, 26, junio-julio 1937, p.1.

40) 青年部の候補会員確保の動向については以下を参照されたい。渡邊千秋「候補会員という制度からみるアクション・カトリカ男子青年部」『青山国際政経論集』107, 2021年, pp.1-20. (<https://doi.org/10.34321/22066>).

一般兵士を勧誘できるよう宣伝用パンフレットを作成、配布した⁴¹⁾。またこういったパンフレットは、野戦病院などでも配布された⁴²⁾。

実際に戦線にいる兵士になにがパンフレットをつうじて求められていたかといえ、ロザリオの祈りをささげることで自分の苦しみに価値を与えること、赦しの価値を高めること、敵を許すこと、神に反して戦地で戦いながら死にゆく者たちが最終的に悔い改めるよう求めること、そのような実際の行動をとおして福音を述べ伝えること、といった内容である⁴³⁾。こうしてアパリシは、青年部は、戦地での部員の精神的安寧を追求することはもちろん、部員ではない青年兵士に青年部のカトリック的人格形成の場を提供して勧誘することにも熱心に取り組んだ。青年部にとって戦地はあらたな部員獲得の場であり、信仰から離れていった宗教に無関心な青年層を、祖国愛のもとにふたたびカトリック信仰へと導くことが緊急の課題であると考えていた。

政治的イデオロギー闘争を背景としておきたスペイン内戦において、青年部の多数が何らかの形で実戦にかかわる状況のなかでは、宗教と政治のあいだの厳密な線引きをすることは困難であった。そのような事実、青年部員が、正規軍へ徴兵されるケース以外に、第二共和政期に存在していた右派政党の民兵として参戦していたことに象徴的である。ただし青年部は、あくまでも青年部が特定の政党に關与する団体であると認識されることを避けたという点で、第二共和政期以降から一貫して「非政治主義」をとっていた。よって1937年4月の統一令にて統一ファランヘ党が成立したのちも、青年部員各自のもつ伝統主義者、ファランヘ、アクション・ポプラー青年部などといったもとの

41) 上級評議会が出版した組織宣伝用のパンフレットとしては、たとえば以下を参照されたい。Consejo Superior de la Juventud Católica Española: *Epistolario del frente. Espíritu de los soldados de Cristo en España*, Bilbao, Editorial Eléxpuru Hermanos, 1937. Id: *Milicia de Cristo. Centros de Apostolado de Vanguardia*, Burgos, Hijos de Santiago Rodríguez, s.d.

42) “Hospitales: ¡Dolor!”, *Spes. Revista Mensual. Órgano de la Juventud Masculina de A. C. Pontevedra*, 33, septiembre 1937, p.2.

43) *Signo*, 4, 20 noviembre 1936, p.6.

政治指向・心性は尊重されたのである。

そのうえで、アパリシはあらためて、敵をも青年部に取り込むことを目指して祈り、キリストのもとにひとつになることを夢見る。それこそが、偉大で自由な一体性を持つ唯一の道だという⁴⁴⁾。そして、そのためには、祈りと犠牲こそが重要なのであった。

いまだキリストの王国に対して心を閉じたままで、またキリストを知らずに、キリストを憎む者たちのいるスペインにおいて、キリストのために思い悩むすべての者を忘れずに、私たちにとって生きることは祈ることだと納得しつつ、祈り、また犠牲を払うようにしよう⁴⁵⁾。

内戦継続中に、アパリシは個人で、また時に上級評議会のメンバーとともに、フランコ陣営支配下にはいった地域を視察して回り、直に活動・運営方針を伝えてもいる。彼にとってそのような旅は、「解放された」地域へ赴き、それぞれの地域出身の内戦で死亡した部員の存在を心にとめつつ、組織を再形成する試みと結びついていてた。視察地で、実際に戦死者の葬儀に出席することもあった。たとえば、1936年12月になって、アパリシはガリシア地方トゥイ司教区連合を訪問し、翌年サンティアゴ・デ・コンポステーラで開催を予定する青年部全国大会についての講演を行ったのだが、この折には、同司教区連合の部員1名の葬儀に出席している。司教区連合の聖職者顧問、その他役員とともに、墓地まで遺体を運ぶ「野辺送り」に4キロメートルほど徒歩で付き添った⁴⁶⁾。

以下、アパリシの主だった訪問地を挙げてみたい。すでにここまで述べたように、アパリシは、聖年における行事開催をめぐるサンティアゴ・デ・コ

44) フランコ陣営のスローガン「スペイン、1つで、偉大なそして自由な(“España, una, grande y libre”)」と類似するが、完全には一致しない文言「偉大で自由な一体性(Unidad Grande y Libre)」を用いている。

45) Manuel Aparici Navarro: “El mes de junio llega...”, *Signo*, 9, 1 junio 1937, p.2.

46) “Movimiento de nuestras organizaciones. Información de las Uniones Diocesanas”, *Signo*, 5, diciembre 1936, p.7.

ンポステーラ司教区連合をはじめ、ガリシア地方の司教区連合は何度も訪れた⁴⁷⁾。また、たとえば、1938年5月、ポルトガル国境近くのカセレス司教区連合におけるカトリック宣言式典と記章付与式に参加した⁴⁸⁾。サラゴサ司教区連合の会合に出席し、地理的に前線と後衛とを結ぶ場所に位置するサラゴサ司教区連合の活動を強化し、前線にいる部員兵士を補助するための前衛セントロ使徒職の設置に貢献した⁴⁹⁾。また、マドリード・アルカラ司教区連合において、マドリード市の周縁部がフランコ陣営の掌中にはいるなかで、「解放された」地域での委員会の任命を行い、戦争が終わった際には、速やかに活動を再開できるように下地をつくろうとした⁵⁰⁾。

また前線から移動する部員を青年部の活動へ誘導するため、短期セントロ(Centro de Transeúntes)を設置したほか⁵¹⁾、1938年秋、戦争のゆくえがみえる頃には、前線に上級評議会の代表部をつくり、全体的な活動の把握につとめようとした⁵²⁾。

1939年にはいと、アパリシは、明らかに戦後を見据えて、たとえばサンタンデル近くのコルバンなどでみられたように、戦争捕虜に対するアクション・カトリカの必要性に関する宣伝活動を行った⁵³⁾。これは、敵を「更生」

47) *Boletín de la U.D. de Juventud de Acción Católica Santiago de Compostela*, 26, junio-julio 1937, p.1.

48) “Importantísimos actos celebrados por los aspirantes de Cáceres”, *Signo*, 25, 22 mayo 1938, p.1.

49) “El presidente del Consejo Superior, en viaje de propaganda por Galicia. Visitó Mondoñedo, La Coruña y El Ferrol. Hubo día en que pronunció cinco conferencias. También ha estado en Zaragoza, donde se presentó ante la Virgen del Pilar en nombre de la Juventud de Acción Católica”, *Signo*, 34, 9 octubre 1938, p.4.

50) “Se reorganiza la U.D. de Madrid-Alcalá. Por delegación del prelado, Aparici nombra una Junta provisional. Llamamiento a los jóvenes de Madrid que se encuentran en zona liberada”, *Signo*, 36, 6 noviembre 1938, p.1.

51) 設置時期として早いものでは1937年秋、エストレマドゥーラ地方、バダホスなどでの例がある。“De las Uniones Diocesanas. El nuevo curso ha comenzado con las mejores y más prometedoras esperanzas”, *Signo*, 13, 28 noviembre 1937, p.4.

52) “Delegaciones del Consejo Superior para los frentes”, *Signo*, 36, 6 noviembre 1938, p.1.

53) “Aparici interviene en varios actos de propaganda en Santander. Uno de ellos fue dedicado a S.S. Pío XI”, *Signo*, 43, 26 febrero 1939, p.4. 4万人ほどの傷病兵・戦争捕虜が聴衆となったという。

に導くために宗教的な権威に接近しようとするフランコ陣営側の政治的な意図と、ピウス 12 世へ賛美を捧げアクション・カトリカを推進しようとする、よき平信徒の思いから生じた相互作用であったといえよう。

青年部の死者のために祈念しつづける

聖職者となるため神学校にはいろいろとしていたアパリシを内戦下ずっと組織の長の地位に留めた要因のひとつに、身近な仲間たちの死がある。戦争のなかであって、アパリシは青年部部員からでた死者たちへのオマージュを継続して捧げ続けた。全国大会の開催が危ぶまれるなか、内戦勃発後半年余りの時期に発刊された 1937 年 2 月の『しるし』では、アパリシは死亡した青年部部員が巡礼道を照らす星となっているのであるから、彼らの魂の安寧のためにも第 3 回全国大会は開催されねばならない、という考えのもと、次のように述べた。

私たちは、巡礼の道にあってくじけず、先頭にたって常にスペインに仕えつつ出発しよう、それは神への奉仕なのだから。リベラ、オルティス、ニエト、サダバ、その他多くの者たちは殉教者として勝利の光とともに、サンティアゴの道における新しい星となり、私たちに栄光の道を照らしている⁵⁴⁾。

アパリシが、彼らを内戦で死亡した青年部部員の代表として認識し、殉教者と呼んでいることに注目し、ここで列挙される会員について、簡単に整理しておきたい。

アントニオ・リベラは、1916 年生まれ。第二共和政期にカトリックの闘士として頭角を現した、古都トレードにおけるリーダーであった。アルカサル包囲戦において、志願して武器をとり戦った人物である。彼が言ったとされる

54) Manuel APARICI NAVARRO: “Por el impulso y la fe del alma hispana, a la conquista del mundo entero para Cristo”, *Signo*, 6, febrero 1937, p.1.

「敵を憎まずに撃て」ということばは、よき平信徒として敵とはいえ人間を殺害することに思い悩む青年たちの支えとなったといわれ、彼は「アルカサルの天使」という異名をとった。戦闘でうけた怪我が治癒せず、1936年11月に死亡した⁵⁵⁾。

ルイス・オルティスは、1905年生まれ、マドリードのサン・ヘロニモ教区セントロに所属する部員であった。内戦勃発直後に志願、1936年7月22日、ソモシエラの戦いで戦死した。青年部内では、彼は先駆的殉教者とされた⁵⁶⁾。

フベンティーノ・ニエト・ブランコは、1909年生まれ、トレード県タラベーラ・デ・ラ・レイナの青年部部員であった。小学校教員として働く一方で、1935年、宗教政党アクション・ポプラール青年部の地区長に任じられており、第二共和政期に青年部部員が政治に身を投じていった典型例として捉えることができる。内戦勃発直後の1936年8月上旬に共和派によって殺害された⁵⁷⁾。

ハビエル・アロンソ・サダバは1918年生まれ。アストゥリアス地方オビエドにあるサンタ・マリア・デ・ラ・レアル・デ・ラ・コルテ教区セントロの部員であった。内戦勃発後、アストゥリアス管区のミラノ歩兵連隊で伍長を務め、オビエドから3キロほど離れたサン・エステバン・デ・ラス・クルセスの戦いで死亡した。

これら4名の歩みをみると、死亡時の年齢は10代末から30代前半までに分布している。また、死亡理由も多様で、実際の迫害をうけるかたちで殺害されたものもいれば、戦闘に兵士として参加し、前線で死亡したものもいることがわかる。しかし、アパリシはこれら青年部部員の死者を、区別なく全て「殉教者」と認識した。彼が、内戦自体を宗教戦争として捉えていたことの証左であろう。

55) Isabelo HERREROS: *El Alcázar de Toledo. Mitología de la Cruzada de Franco*, Madrid, Ediciones VOSA, 1995, p.82.

56) *Signo*, 4, 20 noviembre 1936, p.2; *Id.*, 33, 25 septiembre 1938, p.1.

57) Jorge LOPEZ TEULON: “Justino Nieto Blanco. Maestro”, en la página web de “Persecución Religiosa”. <https://persecucionreligiosa.es/index.php/otros-martires/laicos/336-nieto-blanco-juvento>.

その後も、アパリシは内戦で死んでいった青年部の仲間たちを偲び、度々回想している。時間が経つにしたがって、彼が想起する人物は、ともに働いた記憶が強い青年部幹部が多くなったようである。彼によって書かれた日記にみられる一例をあげよう。

私が「主は私に与えられた分、私の杯…」といった時から、私はこの世にとって死んだものとなった。その時以来、私は、フェリックス・リャノスやマノロ・リャノスと同じように、またモレノ・オルテガのように、マッククローンのように、エリヒオ・リベラや、アントニオ・リベラのように、十字軍の、第二の時の殉教者なのだ、そうして自分の者たちのために奉仕するのではなく、神の栄光と利益のために奉仕するよう、神は私に命をお与えになったのだ⁵⁸⁾。

以下、ここで名前が挙がっている人物について短くまとめてみよう⁵⁹⁾。

フェリックス・リャノスは1904年生まれ、マドリードのサン・ヘロニモ教区セントロのリーダーであり、内戦勃発時はスペイン勸業銀行の法律顧問であった。弟のマノロ・リャノスは、1912年生まれ。上級評議会において長く候補会員委員を務めた。両名ともマドリードで共和派により1936年11月に殺害された。

アグスティン・モレノ・オルテガは1899年生まれ、イスパノアメリカ銀行に勤務していた。1929年には青年部上級評議会の常任メンバーとなり、1933年には上級評議会の副部長を務め、内戦勃発当時にはマドリード司教区連合長であった⁶⁰⁾。

58) Manuel APARICI NAVARRO: *Diario espiritual del Siervo de Dios, Manuel Aparici Navarro*, Madrid, Asociación Peregrinos de la Iglesia, 2005, p.587. 詩篇16:5からの引用「主は私に与えられた分、私の杯…」は、ラテン語で記されている。1946年6月13日付。また出版を担った協会によって編集されており、全公開ではない。

59) なお、エリヒオ・リベラについては、現在までのところ情報を得ることができていない。

マヌエル・マッククロン・イ・ハラバはマドリード司教区連合の副連合長であった⁶¹⁾。やはり、共和派によって1936年11月にマドリードで殺害された人物である。

このように青年部部員の血が流された内戦は、アパリシにとっては第二の「十字軍」でありつづけた。組織のために共に活動した部員の死は、彼らのためにも組織を発展させねばならないと彼に思わせたはずである。だからこそ、戦後も敵を「再キリスト教化」することが必要だという思いにいたるのである。

戦争は終わったが、十字軍はまだ道半ばである。今、深く集中した時が始まる。後衛では、日ごとに塹壕の罪のなかで君たちが強めてきた使徒職の偉大な精神を伝えることで、その救いに協力するよう、神の真実に飢えた幾千もの魂が君たちを待っている⁶²⁾。

おわりに

そうして、アパリシは、戦後も、祈念すべき青年部の死者の存在に事あるごとに言及した。しかし、その折には、部員各自の政治的傾向は問わず、あくまでも彼らを青年部全体の殉教者として想い起こすよう求め、彼らを顕彰しつづけたのである。その行為は、彼らの死を無駄にしないためにも青年部の活動を活性化することに力を注ぐ必要があるのだ、青年層における宗教的精神の涵養こそが彼らの死に報いる方法だ、とでも考えているかのように、徹底していた。

アパリシが上級評議会の部長を辞し、聖職者となるために神学校に入るのは、青年部にとっての戦後処理が一旦落ち着いた、1941年のことであった。

60) “Agustín Moreno Ortega”, <https://www.acdp.es/quienes-somos/secretariados/causas-de-canonizacion/agustin-moreno-ortega/>

61) “Funerales por Moreno Ortega, Alarcón y Mac-crohon, directivos que sufrieron martirio”, *Signo*, 56, 8 diciembre 1939, P.2

62) “Aparici habla en Madrid a los Centros de Vanguardia”, *Signo*, 47, 11 junio 1939, p.2.

Resumen

Cómo apoyar a los militantes en el frente de guerra: Actividades de Manuel Aparici Navarro, presidente de la Juventud Masculina de Acción Católica Española (1936-1939)

J.Chiaki WATANABE

Este artículo ofrece una breve biografía del presidente nacional de la Juventud Masculina de Acción Católica Española (JAC) durante la Guerra Civil española, Manuel Aparici Navarro, miembro destacado de la JAC ya durante la II República. Después de escapar de la persecución y trasladarse a la ciudad de Burgos, tomó las riendas de la organización de la JAC en la retaguardia. Con enormes dificultades, trabajó para mantener la JAC entre los muchos socios numerarios que se trasladaron a luchar en la zona de Franco, huyendo de perder la vida en la zona republicana. Aparici mantuvo la actividad de las Uniones Diocesanas de la JAC en la retaguardia, animando a los jóvenes aspirantes sin experiencia, mientras visitaba las Uniones Diocesanas de las zonas liberadas para reconstruir la obra. Promovió la creación de Centros de vanguardia en el frente para evangelizar a los compañeros-soldados de las trincheras. Soñó con realizar una gran peregrinación a Santiago para celebrar allí el III Congreso Nacional en 1937, pero no consiguió hacerla. Sentía un dolor profundo ante la muerte de socios de la JAC por la guerra y siempre llevaba a la oración el sufragio por sus almas, propugnando la celebración de un acto de conmemoración pública. Terminada la guerra civil y tras, en la medida de lo posible, la estabilización de la JAC, en 1941, ingresó en el Seminario de Madrid-Alcalá.